

---

# 長靴少女

桃皐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

長靴少女

### 【Nコード】

N3718BA

### 【作者名】

桃皐

### 【あらすじ】

外履きは長靴。内履きも長靴。雨の日は長靴。晴れの日も長靴。いつでも、どんな時でも長靴。そんな、なんの呪いかと思う程長靴を履き続ける少女と出会ってしまった日から、オレの人生は変わった。コメディ高比率でお送りする学園妖怪ファンタジー（ジャンル詰め込めばいいってもんじゃないぞ）。※残酷な描写ありは保険です

## 前編（前書き）

前後編予定です。

エピソードが浮かんだら随時追加します、予定。

## 前編

彼女を見たのは梅雨の時期だった。

梅雨特有のじめじめした空気のこもる教室、それにも関らず割と元気にふざけるクラスメート。

朝のホームルームが始まるまでの少し気だるい活気を耳に入れながら、オレは窓の外を眺めていた。

水溜りの目立つグラウンドは曇り空を映し、さすがにホームルームも始まる時間だから人っ子ひとりいない。

ぴちゃん、と。

人っ子ひとりいないと公言したばかりだというのに、校門前の一際大きな水たまりに大きな波紋が広がった。

続けて、同じくらいの大きさのものが2つ3つと交互に道を描いて出来あがっていく。

それを作り出すのは、真黒い長靴。

同じテンポでゆっくりと水溜りを進む両足は、長靴が不釣り合いなほど細い。黒い長靴と反するような太ももが白い。

太ももが見えるってことはつまりスカートってことで、つまり女子だった。

うちの指定のセーラー服を着た、長くてふわふわと柔らかい栗色の髪をした、色白の子。

4階から眺めているオレには顔は良く判断できなかったが、雰囲気的に可愛いと感じた。

何の気なしに彼女がグラウンドを真っ直ぐ横切って校舎に吸い込まれるのを目で追って、悪いとは言わないが、長靴でももっと可愛いの履けばいいのと思った。

それが、最初。

\*\*\*\*

「あ、それ川島さんじゃない？」

高校生ってのはだいたい話のネタに他人を持ってくることに躊躇がない。

別に笑い話でも何でもない風に話したが、同じ輪で談笑していた女友達がからかう様な声色でそう返したのに少し眉根が寄る。が、空気の読める日本人は場を壊さない。

一瞬で表情を興味津津に変えて、オレは彼女に向き直った。

「川島さん？知り合い？」

「知り合いついていうかね、ちょっと有名っていうか。あの子ね、いつも長靴はいてるんだって。」

「いつも？晴れの日も雨の日も？」

オレの問いに軽く笑った彼女は、首を振って言った。

「校舎内でも。うちの学校、靴は指定ないじゃん？川島さんは長靴が上履きで、もちろん外履きも長靴。ずーっと長靴はいてるんだってさ。」

トイレとかどうなんだろうね、と、ふと真面目に気になった顔をした彼女に適当に相槌を打ち、さらに話をきいたことには。

朝の女の子は、川島<sup>かわしま</sup> 雨露<sup>うろ</sup>と言らしい。

オレと同じ高校1年で、クラスはオレのA組から一番遠い、別棟のG組。

G組はつまり一番頭のいい奴らが入れられるといわれているクラス。……別にAからだんだん頭が良くなっていくわけではない。断じて。

「健輔が気にするってことは、可愛いんだ？」

「ちげーし。普通気にならねえ？真っ黒い長靴履いてる女子高生って。…別に悪いとはいわねえけど。」

ちやかす口調の声が割って入る。

声の主は保育園からの腐れ縁の俊輔だ。名前が似てるからコンビのように扱われるのが遺憾である。

「まあねえ。けど健輔、天然女子高生キラーじゃん。」

「おい。オレは何のクエストをクリアしてその不名誉な称号を手に入れたんだ。」

「健輔 は 女子高生10人斬り を 達成した！女子高生キラーの 称号を手に入れた！」

斬ってない。

「健輔 は 女子高生10人喰い を達「喰ってねえ！」えー。」

えーじゃない。

自分で言うのもなんだが、それなりに見れる顔をしているとは思う。だから顔も知らない女子から告白される、なんて、どこのマンガかドラマかみたいな展開は慣れっこだ。（ていうかホントにあるんだね！）

でも全員断ってる——顔だけで付き合ってくれなんて、ただのオプシヨンとしてしか見られていない気がして。

なんて言えば、恨みがましい視線が仲間内からちらほら。

「この贅沢ものめ：将来、いや来年からハゲろ！むしろ何かこう：後天的なアレになれ！」

「ちょっと具体的なのに曖昧！？」

「ピュアなんだよねー健輔は。入れ食いなら全部食べちゃえばいいのに。」

「奥さん！俊輔さんったらあんな最低男なセリフ吐いてますわよ！」

「まったくね健輔さん！スケさんコンビ爆発しろ！」

とぼっちりだ。

なんて感じで、その川島雨露についての話は終わっていった。

まあその日にあったことがよほど印象的でない限り記憶に刻み込まれることもない。

その程度だ。

そんなこんなで嫌いな授業（理科総合とか。嫌いだアレ）好きな授業（古典とか体育。：両極端とか言ってくれるな）が過ぎ去り、瞬間に放課後がやってくる。

うちの学校は文武両道をモットーにしているそうで、部活も気を抜けない進学校。

でもやる気のない奴らってのはいるため、オレはそういう奴らの抜け道部：正式名称自然部に入部している。

活動内容は自然を愛でること、ゴミを拾うこと。：帰り道途中で。

つまり実質の帰宅部だ。

そういうわけで、さあ部活だ！と熱中している仲間と別れて一人帰宅する。

1年はなぜか4階で学年が上がるごとに階が下がっていくわけだが、あれだろうか。18に近づくにつれ体力でも衰えるのだろうか。

先輩方に知られたら軽く締められそうなことを考えながら、オレは階段を

「お、津山。良いところに。」

降りたかった…！

無視して帰宅したかった…！

「はいはい聞こえてるよな。手伝え、お前帰宅部だろ。」

「先生自然部です！そんな身も蓋もないこと言っちゃだめです先生！」

階段に1歩足を出したオレを呼びとめた声の主は、国語教師の後藤先生。

古典好きが高じて仲良くなったが、外見に似合わず男前で且つ人使いの荒い女性だ。

背の低い彼女は、どうやって持ってきたのか、彼女の眼前、腰辺りまで積みあがっている段ボール箱を指さした。



「…運べ、と？」

「物分かりがいい奴は好きだぞ、津山。ちなみに別棟の化学準備室だ。」

なんで国語教師が化学準備室行きの段ボールとか運んでるんだ。

そして返事してないのに話は終わったとばかりに背を向けるとか先生として…いや人としてどうなんだ。

「先生は津山がか弱い女性にこんな重労働させていては黙ってられないジエントルマンだと信じてるぞー。」

信じなくていい。

むしろ先生はか弱くなく嘘ですか弱いです。

かくしてオレは、オレ自身はなんの用もない別棟に向かうことになり。

そして今朝の彼女と再会する…まるで呪いでもかかっているかのよう、雨を連想させる彼女に。

\*\*\*\*\*

「つー、か、重っ！」

段ボール箱はそれほど大きくはなかった。それが3つ。

だが小さい段ボールってのは中身が相当な重量持っているものである場合が多いとオレは思う。

ミカン然り、缶ジュース然り。

これも持ちやすい大きさではあるのだが、いかんせん何が入っているのか知りたくなるほど重い。

しかも手書きで『ワレモノ』『上』『水濡れ厳禁』とかご丁寧に書いてあるからそうそう粗雑にも扱えない。

オレはもといた4階から3階に降りて渡り廊下を進み、現在別棟の階段を1階に向かって降りているところだ。

ていうかなんで化学準備室なんて別棟の1階端っこにある部屋に向かわせるんだ。

職権乱用じゃないかコレ。

今年中学校から上がったひょろい男子高校生になんてものを持たせる。

っていうか運ばせるなら手伝うとかしろ。

古典について語り合えるのは良いが、こういう弊害はまったく嬉しくない。

ぶつぶつと呟きながらなんとか気を紛らわせつつ階段を下りていると、ずるりと足が滑った。

「え」

運動神経は良い方だ。

だが重い物を抱えた体はバランスがとりにくく、そしてその重い物にはワレモノと書かれている。

一瞬の逡巡が命取り――

：不幸中の幸いは、階段の踊り場までの段数が少なかったことだろうか…。

「…いつ……」

健気にも段ボールを守り抜いたオレは、踊り場の床に打ちつけた尻の痛みに悶絶しながら、少しでも痛みが消えるように尻筋に力を入れて地面から体を浮かせる、なんて微妙なことをしていた。

ホント、痛い時って何やっても無駄なんだろうけどなんとか緩和しようと思のままに頑張るよね。

あー、痛い。マジでいたい。これ尻二つに割れたんじゃないかな。

「…大丈夫？」

半泣き状態で床に尻をこすりつけるとか間拔けな痛み克服法を実施していたオレに、まさかの他人の声がかかった。

しかも女子。

え、これオレの男としての矜持終わっ

「あ…。」

なんて、この放課後何かとオレの人権に関わる問題によく直面するな、とか思いながら半分やけくそで見上げた先には真っ黒い長靴。ぶらぶらと揺れるそれは階段踊り場の大きな窓の前、割と広く取ってある窓のさんに腰かけている彼女の足。

朝見た時より近距離だから、余計に細さが際立つ。

そしてまったく見えないスカートの中（絶対領域）。

黒いハイソックス。

背中に広がる栗色の髪はどこかヨーロッパの人形のように波打ちながら広がっていて、そして顔は…あれ？

いや、悪くはない。

整っている。

でも朝の印象と違ってきつめ。  
…目は普通に焦げ茶なんだな。

「……あ、大丈夫。」

ふと、彼女からじっと視線を受けて、返事を返していなかったことに気付いたオレは間拔けな返答をしていた。

日本人の悪い癖だ、大丈夫じゃなくても大丈夫と答える条件反射。

でもまあ実際ケツの痛みもだいぶ引いてきたし…何より、これ以上オレの人権とかプライドとかそういうった類のものが傷つくのは耐え難い。

「そう。」

これ以上何も突っ込んでくれるな、というオレの心が届いたのか、彼女は無表情に言い放つと自分の背後にある窓へと視線を向けた。

「…雨、降るかしら。」

自問したのか、オレに尋ねたのか、どちらともつかない声音、声量で呟く。

答えるにしろ、このまま床に転がったままでは何かハプニングを期待しているととられかねないためオレは慎重に起き上がった。そして気付く。

「うわ、なんだこれ…」

オレが滑り落ちたあたりの段から、まるで雨でも降ったように水たまりができている。もちろんオレの悶絶していた床もだ。

梅雨の季節は校舎の壁とか結露しやすいが、こうもあからさまに水がたまるなんてことはない。

ひょっとして雨漏りでもしているのだろうか。

「ごめんなさい、それ私のせいなの。」

「え…？」

いつの間にかこちらに視線を戻していた彼女…川島雨露は、少し顔をしかめて言った。

それ、が指すのがこの水溜りなら、何をしたというのだ。

窓を開け放していたから雨が降りこんだ？否、黒い雲の垂れこめる空は、しかし雫を落としてはいない。

何か水の入っていたものを運んでいて零した？否、ならばなぜここにいるのにそれを拭こうとしていない。

…水遊び…ここで？何で？

瞬時に思考したが全く正解が浮かばず、続きの言葉を待って彼女を見返す。

すると首を傾げた川島は、ひょいと腰を浮かした。

きゅ、とゴムの靴底が水に濡れた床をこすって音を立てる。

「慰謝料請求する？」

「しねえよ！」

びっくりしたわ。

びっくりして初対面で突っ込み入れてしまったわ。

開口一番それって何。

もしかしてご両親のどちらかは法律関係の方ですか。

「?　じゃあ何が不満なの?」

「いや、え、不満ってか…私のせい、ってどういうこと?」

聞いちゃまずいことかと一瞬ためらったが、彼女はちょっと悩んでからいたって無表情に

「雨を降らせちゃって。」

とこぼした。

……だいぶ比喻表現をつかってくるが、恐らく何かをぶっちゃけた  
Ⅱ雨を降らせたっていう認識で間違ってる。多分。

「あー…そう、なんだ。つか、なら拭こうよ。オレみたいな被害者を増やさないためにも。」

「……そう、ね。質量は変わらないものね。」

……えっと。

え?

……川島 ああああ!

すまん、オレにはお前はレベルが高すぎるらしい!

っていうか無表情きつめ不思議ちゃんってことでオッケーですか!?

「あーうんうん。質量保存の法則とかって言うしな。じゃあオレ荷物運んでる途中だから。じゃあ。」

「うん。ごめんね、…えっと。」

「あ、オレ津山。」

「津山君。」

「……………」

…そして自分は名乗らないっていう！

「お前も名乗れ、阿呆。」

「いや誰もそこまで言ってな…え？」

「え？」

「え。」

3人分の『え』が踊り場に響く。

一回目のはオレで、疑問を含んでいる——聞き覚えのない第三者の発言に対する。

二回目のは川島の。オレの『え？』に対する『え？』だ。

三回目は、第三者、川島を阿呆と呼んだ声と同じ。

そしてその第三者は、現在進行形で川島の首元からオレをガン見している——

「ほほう。この小僧、儂が見えとるぞ。」

「不用意ね、水ツ霊<sup>みずち</sup>。どうするの。」

人形だと思った。ぬいぐるみとか。

やけにリアルだしなんか輝いてるけど、そう思ったかった。

でも喋る度に口が動くし、重力に逆らうようにたゆたう鬘がその存在を違う次元だと示しているようで。

「…へ、へ「蛇と呼んだら生涯水難にあわしてくれるぞ小僧。」…  
…龍？」

そう、龍だ。

蛇ってのは少しでも現実世界から遠ざかりたくないオレの精一杯の抵抗の証だったのだが、本人になんか怖い目にあわされそうなので仕方ない。

白いのか青いのか、むしろ水色のような薄い色をした、直径5センチくらいの細長い龍。

それが、川島の足元に広がる水たまりから湧き出て彼女を取り巻き、そして首のあたりの髪から頭を出している。

「うん？小僧、お前水の眷族の血を引いているな。道理で。」

なんかいきなりオレもファンタジーの世界に片足突っ込まされたセリフが聞こえた。

いや、そんな気がしただけだ。

なんか眷族とか聞こえたけど馬鹿な。何を根拠に。

「津山君、消されるなら何が良い？」

それは方法！？それとも命的な何か！？

「小僧が怯えているだろう、雨露。お前の言葉は稚児のようでわかりにくい。」

「……記憶か、津山君か。」



「阿呆め。いらん付け足したせいでよけいに怯えとるわ。」

なんだか夫婦漫才のように息の合った掛け合いをしているが、そのネタが大変自分に関係している。

これで笑えとか言われても笑えないし、むしろひきつる。

っていうか主語が加わったらつまり、『津山君、消されるなら記憶か津山君かどっちがいい？』ってことになるんだが。

…断然記憶でー！！

でも記憶ってどのあたりからどのあたりまで！？

オレのアイデンティティごと消えるならどっちもどっちな選択肢なんですけど！

「…ごめんなさい、説明うまくないの。うちに来てくれる？どの道…帰せないし。」

困ったように眉を寄せて、川島は物騒な事をのたまった。

決定権はオレにないってことですわわかります。

「…わかった。わかったけど、とりあえず…」

これ、置きに行かせて、と。

オレはずっと抱えたままで腕を痺れさせる凶器と化した段ボールに視線を落とした。

もしこのままこれを放置で帰ったら、違う命の危険が迫るに決まってるんだ。

\*\*\*\*\*

## 後編

帰り道は無言。

そして見えてきた、閑静な住宅街の名にふさわしいお屋敷ゾーン。その一角、夕日に照らされ一際門構えが堂々としている気がしないでもない川島家に、オレは足を踏み入れていた。

素敵な枯山水ですね川島さん！ こういう砂利の波紋って毎日誰か描いてるんですね！

「雨露お嬢様、おかえりなさいませ。：そちらはお友達ですか？」

笑顔で睨みつけるなんて素敵なスキルを持っている人間に幸か不幸か今まで出会ったことはなかったが、まさに今出会ってしまった。素敵なスキル過ぎて冷や汗と悪寒が半端ない。しかも黒スーツ（関係ないか）。

そんな玄関での出迎えに固まったオレを後目に、その素敵スキルさんに鞆を渡した川島は、

「津山君よ。：水ツ霊が見えるの。部屋へ案内を頼みたいのだけど  
：」

と、とりあえず状況説明らしい言葉を発した。

それを受けた素敵スキルさんは一瞬瞠目し、すぐにそれを笑顔に変えた。睨んでない、ちゃんとした。

「水ツ霊様を：。わかりました、では津山様、こちらに。」

「あ、はあ。」

まぬけな返事だとは自分でも思うが、ずいぶん前からオレは半分くらい機能していないのだから仕方あるまい。

現在かろうじて機能しているのはツツコミ魂とかその辺の不要な器官くらいだ。

「着替えたら行くから。」

そう言い置いて、川島はオレに見向きもせずに屋敷の奥へ消えていく。

残されたのは、呆然と土間に立ち尽くす俺と、川島の鞆をうやうやしく抱えたままの黒スーツな素敵スキルさん。

他人に無頓着な気はあったが、ここまでとは思わなかったぜ川島！

「お飲み物は緑茶でよろしいでしょうか？紅茶、コーヒーもございますが。」

「あ、緑茶で、お願いします。」

結局素敵スキルさんに案内されるまま縁側を歩き、玄関から通ってきた枯山水ではなくちゃんとした本物の木と水が流れる庭園を望みながら辿りついたのは、お座敷。

部屋中央には深い飴色をした背の低い木製の長机がでーんと据わっていて、床の間には赤紫の紫陽花が青磁の壺に飾られていた。

料亭とかそんな一室を連想させるが、残念ながらそんなものに実際入ったことはない。

勧められるがままに黒い木製の背もたれがある座布団（名称がわからない）に着席し、にこやかな素敵スキルさんの「では少々お待ちください」、という言葉で一人取り残された。

……さあてと。

状況を確認する時間が出来たぞ津山健輔。これを逃したら素敵スキルさんとか不思議ちゃん川島とかに圧倒されて何かがうやむやになる可能性もある！

では最初から追うぞ、オレの身に起きた不可解な出来事を。

えー……、

別棟の1階化学準備室への荷物を運んでいた。

うん、これは理不尽だった。今考えても理不尽以外の感想は出てこない。あ、とりあえず荷物は重かったな。

で、別棟に来て階段を下りている途中、こけた。

あれは痛かった。普段ならバランスをとれてたかもしれないが、手に持った段ボールを死守した健気なオレはケツを強打、悶絶。

：思い出すと今も痛い気がする。きつと青あざになってるんだろうな：蒙古斑みたいにな：。

こけた理由は水。あたり一面水浸しで：川島に見られていたのに気付くのもこの辺。

恥ずかしかったな、オレの矜持とか色々消え去ったんじゃないかと思っただけなものな。

んで水浸しは川島によれば川島のせいで、しかも雨を降らせた、と。あれは結局どういうことだったんだろうか。

雨を降らせた……言葉、通りに？

しかも蛇……じゃない、龍。ミズチとか呼ばれた、薄青い細長い龍。

川島の肩から顔を出していた。あれがそもそもオレがここにいる理由で：眷族、とか？

あれ本物なんだろうか。いや、まあ会話してたしなあ：オレの幻覚とかじゃないなら本物なんだろうが…。

それで、どうも会話から察するに、ミズチとやらを見られたのは誤算で、そのためにオレの記憶かオレ自身かを消されるとかそんな物騒な話に。

あれ？ホイホイついてきたけどオレ帰れるの？

…まあ…いきなり殺すはないだろうな…。今の時代、人一人いなくなるで大変な事になるし。

よし、さらに回想する。

でも後は特に何も収穫はないんだよな…無言で一緒に歩いて、その間ミズチってやつが面白そうに道路のアスファルトから水紋を作り出しながら跳ねてたっけ…。

「そういえば…さっき、川島長靴脱いでたな…。」

ふと思い返して気付く。

いつも履いてるって聞いてたのに。

上履きも外履きも長靴なら家の中でも長靴なのかと思えば、普通にスリッパだった。

…よし。

状況確認は終わったが、まあよくわからないということがわかった。一応説明はしてくれる気があるらしいため、今は待つしかないだろう。

なんととはなしに室内を見渡し、素敵スキルさんが出て行ったふすまの上にある欄間を眺める。

構図は龍が雲間を泳いでいる様を現していて、なんていうか…非常に先程見たちびっこい龍を思い出させる。

「お待たせいたしました。」

「…っ」

眺めていた欄間の下、ふすまが突然開き、お茶とお茶菓子を盆に乗せた素敵スキルさんが現れた。

当然のごとくその足元は畳なのだが、あの特有の衣擦れの音しなかったぞ…。

オレが気を払ってなかったから仕方ないのか、それとも素敵スキルさんは他にも素敵スキルを備えているのか。

「申し遅れました、私 雨露お嬢様の側付きの上田と申します。もう直にお嬢様もいらっしゃるかと思しますので、こちらを召し上がりながらお待ちください。」

「あ…ありがとうございます。」

目の前に出された湯気の立つ湯のみと、紫陽花の花を模<sup>かたど</sup>ったらしい和菓子。

全く教養などないオレでも、とってもランク上位のもてなしを受けているっぽいのはわかる。きっと茶器とか受け皿とか、それなりに値の張るものに違いない。恐ろしい。

かといって手を出さないのもなんだかな…ええい。男は度胸だ。

「……お、美味しいです。」

「それはようございました。」

にこにこ微笑んで、オレの向かいの席…ではなく、その向かいの席の斜め後ろに控えるようにして正座している上田さん。

え、気まずいんですけど。

何？何の試練？素敵スキル・上田さんを見無視してお茶を楽しめってこと？

「津山様はお嬢様のご学友であらせられるのですよね？」

「えっ…あ、は、い？」

手持無沙汰にお茶をしきりと口に含んでいると、いきなり話を振られた。その上答えにくい質問すぎる。

「えーと…まあ、そうですね。同じ学年で…クラスは違いますけど。」

「左様ですか。どうぞ、今後もお嬢様をよろしくお願いいたしますね。」

なんか素敵スキルさ…いや上田さんの中でオレすごいランクアップした！

さっきは親の仇かと思うほどに睨まれてたのに、ご学友に同意したとたん川島を任される待遇に！

「余計な口は聞かなくていいの、上田。」

すらり、と背後の障子戸が開いたかと思えば、そんな無表情な声が響く。

上田さんとの二人つきりに戸惑っていたためか、ぜんぜん仲良くなはずの川島の声が聞こえたことがこんなに嬉しいとは思わなかった。

「これは失礼を、お嬢様。」

頭を下げた上田さんをしばらく眺めていた川島は、息を一つ置いてから歩みを進め、オレの向かいに当然のように腰を下ろす。

ところで余談だが、なんとなく川島が着物に着替えてくるんじゃないかと思っていたのだ、オレは。

実際はそんなことなく、普通の女子高生がするようにふんわりと袖や裾が空気をはらむ七分丈の上衣にジーンズ、なんて恰好だったのだが。

川島によく似合っているけれど、あまりにこの場に場違いで一瞬氣をとられてしまった。場違いというか、川島が現れた途端に座敷↓友人宅の客間にランクダウンしたというか、馴染んだというか。

まあ場違いといえば学ランのオレのほうが場違いっちゃ場違いなんだが。

「待たせてごめんなさい、津山君。」

「あ、いや。」

待ったというほど待つてはいない。…なんとも気まずくはあったが、それにしても、川島は不思議ちゃんだが、礼儀はしっかりしているんだな。

「それじゃあ…説明、よね。…何を言えいいのかしら。」

かくん、と首を傾げた川島。

その首元から、例のアレがしゅるりと伸びあがった。

「う、わ」

「お前も大概失礼よな、小僧。…まあ儂らを日常とせぬ者には当然と言えるか。」

ミズチ、だったか。



まったく慣れないが、どうも：現実だってことは認めよう。

「：そうね、これは水ツ霊。水を司る霊なる存在で：わかりやすく言えば、霊だとか妖怪だとか呼ばれるもの。私の：守護、霊？みたいなもの。」

まずはわかりやすいところから、とでも言うように、川島は自分の周りを囲うように体を泳がせる龍を示して言った。

「厳密に言うと、霊というのは実体を持たず、枠のない力や思念の塊のようなものよ。それに対して妖怪は実体を持ち、枠のある力や理念の塊ね。」

「どちらも普通ヒトには見えぬ。だが貴様のように、祖先がその脊族であったもののうち、血を少しでも継いでいると見えることがある。」

ずばん、といきなり気になってはいたけれど聞きたくないことベスト3に入るくらいの内容で斬り込まれ、動揺で手が震えた。

お茶は少なくなっていたからこぼすことはなかったが、それを目に止めた川島は眉を寄せて瞳を伏せる。

「いきなりで驚いてしまうわよね。でも津山君、今までこういうこと：幽霊とかそういうの、見たことないでしょう？」

「いや、ないけど：」

「よく聞かない？力が強いものの近くにいと、素養がある人は引かれて力が強くなる、っていうの。」

それがオレに起こったと？

「まあ小僧の力など微々たるものだからのう、儂くらいの力を持ったものでないとその眼には霧のようにしか映らんじゃろうて。」

本当はもっと複雑な理由があるそうだが、こういう第六感系イベントは初心者のおレに話しても理解は得られないと判断したらしい。だがつまり、おレのご先祖様の中にミズチのような、妖怪（うつわ非日常）がいるらしくて。

それがどのくらい遡った血筋か知らないが、その血がおレにも残っているためにミズチが見えるようになったと。

「津山君みたいな人、昔はたくさんいたんだけどね。今は薄れてきてるみたい。」

「暮らし難しいの。最近の人間は臭い。」

…臭いとか、最近の人間であるおレにとってちよつとショックなんですけど。

やめて！学校で虐められるだろ！

「まあ儂らについての説明はこのくらいにして、本題に入ったらどうじゃ、雨露。」

「……そうね。」

ふう、と息を吐いた川島は、いつの間にやら素敵スキじゃなくて上田さんの淹れたお茶を一口。

無表情ゆえにあんまりわからないが、どうやら緊張しているような。しばし無言で手に持った湯のみの水面を眺めていた川島が、一度目

を閉じてからオレに視線を合わせた。

「申し訳ないんだけど、津山君。手伝ってほしいの。」

「……何を？」

言っておくが。

この、「何を」が出るまでにたっぷり一分以上は待ったからな。

オレの気が短いわけじゃない。

川島が、テンポ遅い……っていうかずれてるっていうか……やっぱり不思議系って認識で良いんですね。

「雨露、お前ほんとに説明に向かぬのう。1話して10わかる者は少ない。ヒトは特に、の。」

さっきから口出ししては妙に人間、というかオレを見ていつてるからつまりオレを馬鹿にしてるんだろうな、この龍は。

「……ごめんなさい、津山君。私から説明をしようと思ったけれど……上田に任せるわ。」

しばらく考え込んでいた川島だったが、ふう、と諦めたように息を吐いて後ろ、つまり控えていた上田さんを振り返った。

それを受けた上田さんは、オレにはとてもまねできないような柔らかな笑みを返し、頭を下げる。

それから語り手を請け負った上田さんから聞かされた、とても一般人にわかりやすくともわかりたくない世界のお話は、要約するところだ。

川島の家は、代々妖怪や幽霊を祓う仕事をしてきた由緒ある家系らしい。

で、川島もその本家跡取りとして小さいころから霊力（うわぁオレ元の世界に戻りたい）を使って鍛錬してきて、今ではもう超一流（これホントに上田さんが使った言葉だから）の術者なんだそうだし。がしかし、現代日本は妖怪・幽霊が活動しにくくなったのはもちろんだが、川島のような術者たちも活動がしにくくなっている。

その最たるものが学校で、人が多くて危ない場所なのに入りにくい、川島たちにとってみれば非常に守りにくい場所なんだとか。

今まさにオレが通っている高校にも霊の集まりやすいスポットがあり、非常に面倒なくらい小物中堅大物様々な奴らがいる、んだそうで。

その集まりスポットを封じるにも、力の流れだとかよくわからないが、バイパス作るにも期間が必要、みたいな感じで今しばらくかかるらしい。

その間も集まってくる奴らを日夜退治したり退かしたりしてるのが川島らしいが、いかんせん人出が足りない、と。

夜はまだいいが、昼間なんて一人で頑張らなきゃいけない、と。

この「夜はまだいい」ってことは侵入しちゃうんですか、ってオレは尋ねないぞ、尋ねない。

とにかく、必要なのは昼間、学校の中でも自由に動ける人手だ。

で、なんてジャストタイミングなんでしょう！なオレに白羽の矢が突き立ったと…。

「無理にとは言わないわ。けれど、それなりの危険はともなうの。」

…ん？

無理にとは言わないわ、つまりオレに無理やり手伝わせようって気

はない。

けれど、それなりの危険は伴うの、ってことは…手伝わなくてもいいが、危険はあるよ、って…

どうということ!?

「川島家の家業は国とも結びつきがあります。しかし津山様のよう  
な、一般の方に知られて良い仕事ではございません。」

言いたいことはわかりますね、っていう笑顔ですねわかります。

「先程雨露が、お前か記憶か選べと言っておったろう。その通りじゃ、小僧。生憎と記憶を消そうとすると必要な部分も消し飛ばすことが多くて、ほんにヒトとは面倒なつくりをしておる。お前を消すとは、そうじゃ、お前の将来、幾多に分かれ繋がるはずだったそれを、意図的に一本を残して消すと、そういうことじゃ。」

こっちも言いたいことはわかります、本当にありがとうございますました。

必要な部分消し飛ぶとかそれなんて北斗神拳?

で、残された将来のルール是一直線に裏舞台なんですね素敵。

「…ごめんなさい、津山君。」

何度目かのセリフに、オレはいつの間にか俯けていた顔を上げた。

この家に来てから、川島は謝ってばかりだ。

確かにきっかけはアレだったが、川島が悪いわけじゃない。

全ては偶然、一つでも条件が欠けていれば起こり得なかった結末。

だ、が。

「…しばらく、考えさせてくれませんか…」

そう簡単に割り切れるはずがない。

だってそうだろう、日常生活に確実に戻れる道はないのだ。

ひとつは記憶と一緒に大切なものまで無くしてしまう（物理）道。

もうひとつは、川島がどっぴりつかっているだろう世界に足を突っ込んだら最後逃がさねえぜぐへへへな道。

それでも、その中から選ばなければならぬ。

全てを断って、絶対に他言しないと誓えば見逃してくれるだろうか？否、それを選んだが最後、敢えてかざされなかった最悪の結末を辿る第三の選択肢が顔を出しそうだ。

いや、っていうか見え隠れしてるから！上田さんそれ仕舞って！

ともかく、オレがいくらその場のノリとテンションで生きているような人間でも、この決断は。

「申し訳ございません津山様。この場でお答えを「上田。いいの、黙りなさい。」……お嬢様…」

良くも悪くも大人な上田さん押し留めたのは、やはり無表情な川島だった。

オレのいる位置からは見えないが、振り向いた川島としばらく目を合わせていた上田さんは、静かに頭を下げた。

「ごめんなさい、津山君。今日は帰ってくれていいわ。私、途中で送るから。」

「…え、いや、ひとりで」

急な展開についていかない口が、勝手に言葉を紡いだ。  
でも俺の選択は正しい。

時間はわからないけれど今けっこう遅いだろう。

いくら超一流な術者の川島であっても、女の子だ。

夜道を女の子に送らせるわけにもいかないし、女の子に送られるとか今日散々碎かれたオレの男としての矜持が息を引き取る決定打になりかねん。

「道、わかる？」

…そうですね、無理ですね。

こんな閑静な住宅街オレ来たの初めてだものね。

黙ったオレをしばらく見つめ、川島は一人立ち上がると部屋を出ていった。

それを受けて、上田さんがずっと下げっぱなしだった頭を上げる。

「お引き留めして申し訳ございません。玄関までご案内いたします。  
…もう口にする必要もないと思いますが、どうか今日起こったことは全てご内密に。」

「…は、い」

ひきつれた声しか出なかったのは、きっとまだ現状把握が出来ていないからだと思いたい。

上田さんが素敵スキルの持ち主だからと言って、そんな、滲み出る黒い気迫で脅すようなそんなザ・裏社会版素敵スキルまで持っているとか、まさか。

そんなわけで、オレは気付けば枯山水を通りぬけ、川島家の大きな門の前に突っ立っていた。

来た時は確か夕暮れだったと思ったが、いつのまにやら周りは真っ暗である。

それでもさすが住宅街というか、金がかかっているというか、いたるところにある街灯までおしやれで素敵ね！

ぼんやりと頭が働かない状態ながら、一緒に外に出た川島に家の住所を尋ねられ、それに答えたきり沈黙がオレたちの間を満たしていた。

いや、かすかに水音が：川島の足元を、行きと同じように水紋を作って跳ねるミズチが鳴らしている。

「……そういえば、川島さんさ。なんで長靴ずっと履いてるの？」

別に今じゃなくても良かったと思う。

もっと訊くべきこともあったと思う。

けれどオレの口から洩れたのは、こんな気の利かない質問しかなかった。

「水ツ霊は水を司るって言ったでしょう。だから、大氣中に水分が多ければ多いほどいい。私も、そう。：これは、雨を連想するもの。」

「：えーと。大氣中の水分が最高に多い、雨の状態が川島さんたちにとって一番いい状態で：で：それを連想させる恰好しておくのも：いいの？」

「そう。私たちの力なんて、所詮科学じゃない。心が、そう思い込めばいいの。」



つまり、川島が雨を感じられればそれだけ強い力が発揮できる、ってことか。

オレ川島の言葉読み取るのうまくなってきたるんじゃない？  
なんて順応スキル。

「……でも、嫌いだわ。長靴なんて。雨も、嫌い。」

斜め前を歩いていた川島の言葉が意外で、オレはその顔を覗き込んでしまった。

やはり無表情。だが、少し不機嫌そうにも見える。

歩き方も少し乱暴になった、ような。

「だけど仕方ないわ。だから履くの。…私は、川島雨露だから。」

ふう、と息を吐いた川島が振り返る。

いつの間にか辿りついたそこは、いつも乗り降りする駅。  
送迎は終わったらしい。

「…少しは、元気になった？」

「え」

脈絡のない問いかけについて間抜け面をさらしてしまった。

ぐるぐるっ、とツツコミ魂と使えない機能しか機能していない脳を  
活性化させて思いを巡らしてみても、この質問の意図するところが  
わからない。

まさか、川島。

お前、

「…励ましてくれてた、んだ？」

今の話のどの辺で励ましたのかわからないゆえに疑問符付きなオレを許してほしい。

話した内容なんて、だって川島の長靴の由来と、実はそれが気に入らないこと、と。

「……ごめんなさい、私、説明も慰めるのも下手なの。」

微かに下がった頭を目の前に、オレは苦笑を零した。

「謝ってばっかだな、川島さん。いや、こっちこそ気付けなくてごめん。」

そうか、慰められてたのか。

だからやけに饒舌だったんだろうな。

「それだけじゃないわ。私と水ツ霊が、不用意に会話してたから。ごめんなさい、津山君。」

川島の無表情が、かすかに崩れる。

崩れ方が微妙でわからないが、恐らく、後悔？

「…川島さんは悪くないよ、まあオレも悪くないし、その…ミズチ、さん？も悪くない。仕方なかった、そう、仕方なかったんだよ。」

川島は長靴を嫌いと言った。

力が強くなる雨が、それでも嫌いだと。

なぜかはわからない。

でも、嫌いでも、川島は仕方ないと言った。  
仕方ないと割り切った川島を理解できるほどオレは川島を知らないけれど、ああ、なんか。

「川島さん、励ますの、割とできてた。」

きょとんとした川島が、少しだけ近い存在に思えた。

それだけでも、この先足を踏み入れることになるだろう世界が、なんとなくかなりそうな気がしたんだ。

〈了〉

## 後編（後書き）

《おまけ》

ねえところでミズチ様、さつき勢いで「ミズチさん」とか呼んですみませんでした、オレ如きがさん付けで呼び出して良いお方では無かったですね、本当に申し訳ありませんでした。

だからあの、その呪詛のような「小僧如きが儂を…水難に…津山家の蛇口爆散しろ」とかやめてくださいませんかね。

〈ホントに了〉

《あとがき》

お粗末さまでございました！

初めての完結作品となります、多分。

前編の前書きにありましたように、インスピレーションが降ってわいたら何か書き足すかもしれませんが、今はここで。  
読んでいただいた皆様に、大きな感謝を。

2012. 1. 10.

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3718ba/>

---

長靴少女

2012年1月10日02時52分発行